

居を解き、灯す

—豊川稲荷商店街における高齢者の閉鎖居住の開放と住商空間の再編—

竹田研究室 A22AB096 永田知里



背景

近年、全国の商店街では店主の高齢化と後継者不足により多くの店舗が閉店しており、シャッター街化が進行している。また、大型店舗の出店、地域の人口減少などで集客力も低下している。

本設計が対象とする商店街も例外ではなく、店主の高齢化や来客数の減少により閉店した店舗が目立ち、商店街としての活力が弱まってきている。

本設計では、閉店した店舗併用住宅を再活用し、次世代への継承と高齢者の生活、店舗併用住宅の在り方を再考し、商店街を活性化させることを目的とする。



▶店を開め、シャッターを下ろしている物件。観光客の流れを断ち切る要因となってしまう

対象エリア概要 ー豊川稲荷商店街ー



▶豊川稲荷商店街のメイン通り



商店街の歴史

1441年（室町時代）

豊川稲荷の始まり

東海義易禅により豊川稲荷が創建された。

1800年頃（江戸時代）

門前町の形成

はじめに宿屋ができてから、土産屋や旅人が休憩するためのお茶屋などの店ができるようになった。

1868年（明治時代）

宿泊客による活性化

昭和初期までは、豊川稲荷を訪れたら一泊してから帰ること習慣だった。宿泊客を相手とする店で活気付いていた。

1955年頃～（昭和30年）

高度経済成長期

全盛期の商店街

東海道新幹線・東名高速道路が開通し、遠方からも気軽アクセスできるようになったことでさらに商店街は賑わった。

1991年～（平成3年）

バブル崩壊

商店街の衰退

娯楽を控えるようになったこと、日本人の宗教への信仰心の低下により、商店街を訪れる観光客が大幅に減少。

★現在

模索する街再生

ソフト先行のまちおこしを行っている。豊川稲荷の御開帳に合わせ、ハード面でも再開発が行われている。

インタビュー調査

商店街に関わる方々にインタビュー調査を行い、以下の回答を得た。

対象者	質問内容	回答
振興組合 会長	商店街の取り組み	・名鉄との連携、新イベントの開催、広報活動などソフト先行の取り組み ・ファサード改修、アーケード管理、複合施設の建設計画
土産屋 店主	店舗併用住宅について 商店街の印象	・家族構成や経済状況の変化で住居を別で持つ人がいる ・後継者がいない ・建物の耐震性が低い ・再開発が進んでいるのは一部のみ ・将来への期待や興味が限定的
不動産	商店街の課題点	・観光客がUターンする地点がある ・シャッターを閉めた店舗併用住宅 →閉店後も店主が店舗併用住宅に住み続けるケースが多い。また駅から近い場所にあるため転居を望まない。物件を売却したとしてもその後の生活負担が大きい。

シャッターを閉じている≠空き店舗

人がいないからではなく、そこに住まう人がいるからこそシャッター街となるのではないか。

街が元気がなくなることが大事！
自分たちも健康に暮らし、
商店街に反映していきたい



後継者がいないからいつまでお店を続けようか...

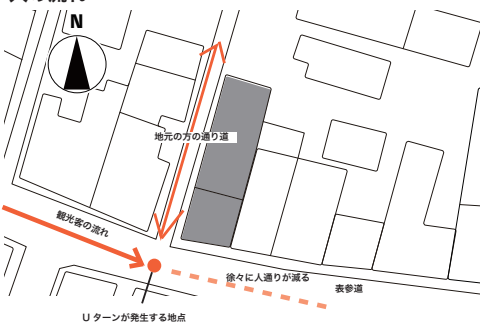


実はシャッターがしまっているお店は
必ずしも空き店舗というわけではないんです
お店を始めたい人が空きを持っている状態です



敷地に内在する関係性

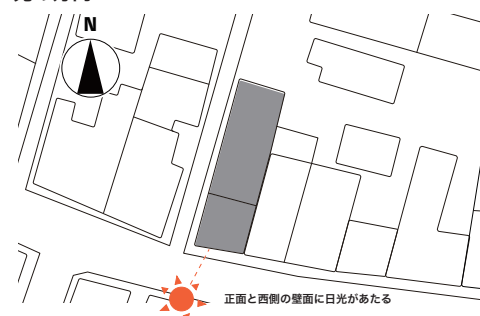
人の流れ



視線の抜け（気配の届く方向）



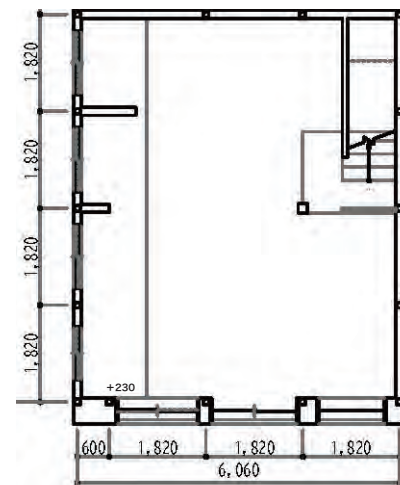
光の方向



元々既存建物の北側にも増築した建物があった。しかし、閉店した後に増築部分は取り壊され、店舗として使われていた建物が残った。



- ・築約80年
- ・木造二階建て
- ・店舗併用住宅
- ・看板建築



1階 1:50



2階 1:50

既存建物平面図

調査からみえたこと

①高齢期における暮らしの閉鎖化

住まいは維持されているが他者（地域の人々）との関係は次第に内向きになっている。

②商いの世代交代を支える仕組みの不在

高齢化が進む一方で、若い担い手へと移行する関係や場が整っていない。

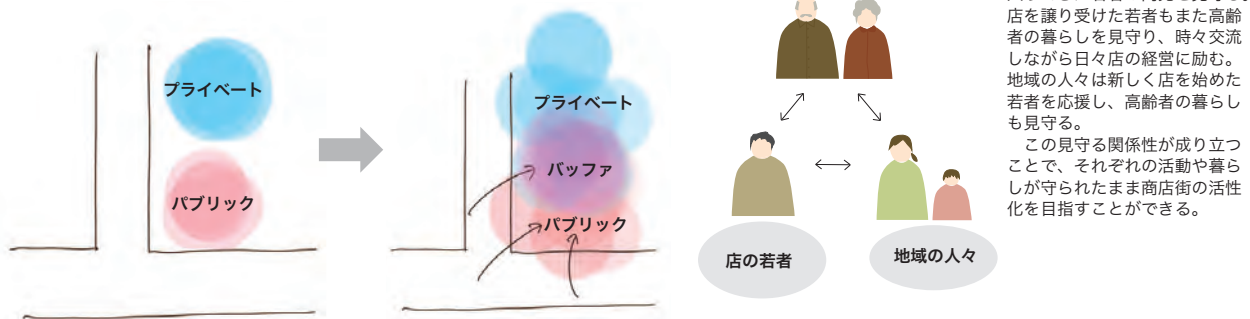
③人の気配を感じ合う関係性の希薄化

日常的な接点の減少により、ゆるやかな見守りの機会が失われつつある。

➡ これらの関係を住商がにじみあう空間として再編。

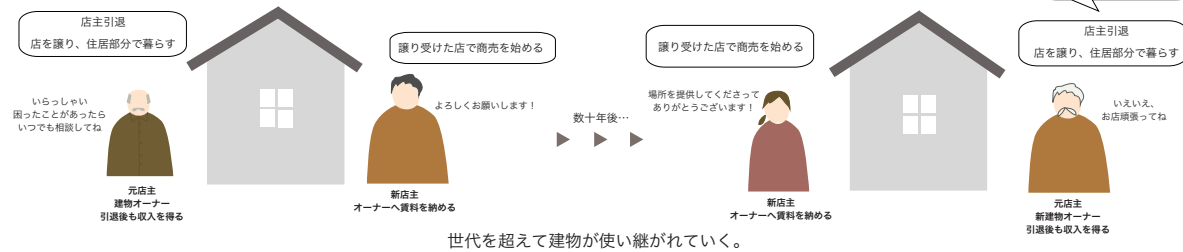
暮らしと商いがにじみ合う店舗併用住宅の再構築

店舗併用住宅で店を営業していた高齢者を住まわせることを想定した高齢者の居住空間と商空間の提案。活動の様子をにじませることで、周囲の人を巻き込む。



店主から退いた高齢者は次の経営者に店を譲り、店に新しく入ってきた若者の商売を見守る。店を譲り受けた若者もまた高齢者の暮らしを見守り、時々交流しながら日々店の経営に励む。地域の人々は新しく店を始めた若者を応援し、高齢者の暮らしも見守る。

この見守る関係性が成り立つことで、それぞれの活動や暮らしが守られたまま商店街の活性化を目指すことができる。



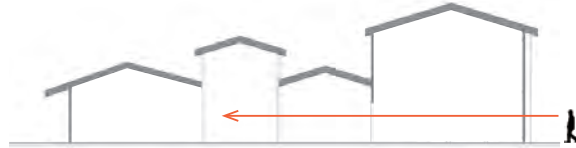
一日のイメージ



パブリック、バッファ、プライベートの三つの領域に分けている。バッファは住宅に住む高齢者と店舗を経営する若者や地域の人々をつなげる領域としている。

1. 床の高さを一定に

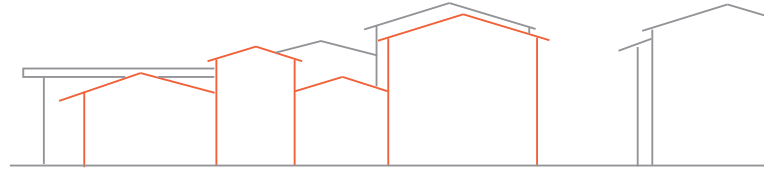
住宅と店舗の間に段差のない連続した関係を生み出した。高齢者の生活の気配と、若者の商いの気配がゆるやかに重なり、互いを自然に感じ取ることができる。



道の曲がり角から土間キッチンがちらりと見える。今日は何をして過ごしているのかな、とここを通った時に様子を見ることが日課になる。

2. 屋根の高さをかえる

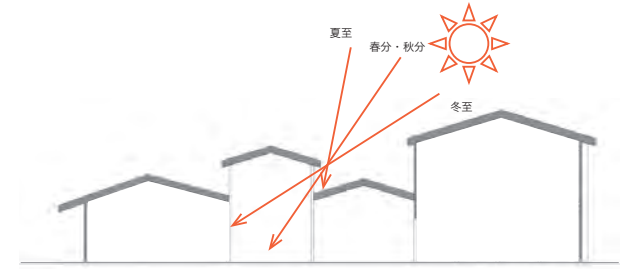
人が集まる空間と、一人で過ごす・調理をする空間、異なる役割を持つ空間ごとに高さを変えつつ、周辺建物に多く採用されている切妻屋根を取り入れた。建物単体で高さの違いによるリズムを生みながら周囲との調和を目指した。



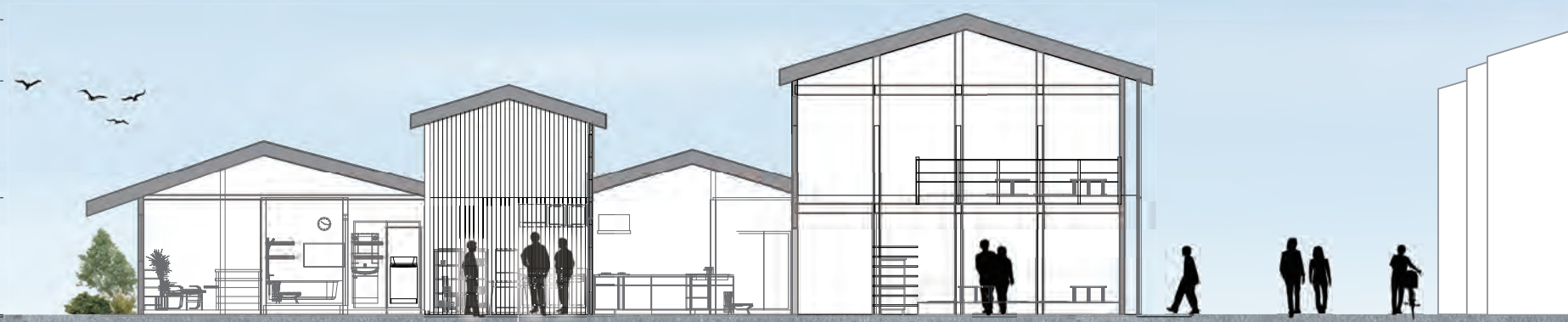
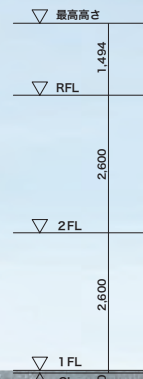
外部から見ると建物が4つに分かれているが、壁で仕切らず扉で仕切ることによって、内部でつながることができる。また高齢者の活動を住宅の中だけにとどまらず、商店街側へ促すことができる。

3. 4方向から光を取り入れる

バッファ領域の土間キッチンを、前後の建物より高さを上げ、多方向から光を導くことで、人が集まる空間として印象付けることができる。

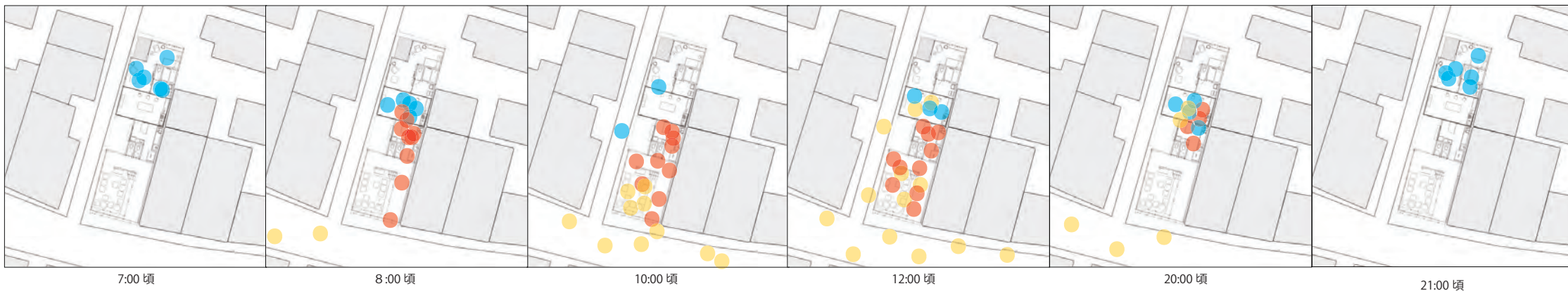


壁の素材にポリカーボネートを採用しているため、日光が拡散されて空間全体が柔らかな光に包まれる。



暮らしと商いの重なり方

高齢者、店主、地域の人々のそれぞれの時間帯で予想される滞在空間とその交わり（●…高齢者、●…店主・従業員、●…地域の人々）



起床
身支度をする

朝ごはんを作る
出勤してきた店主にも
少しお裾分け

植物に水をあげる
運動のため散歩に出かける

帰宅
友人を家に招き、
お茶を飲みながら雑談する

店の営業後に店主が料理を
振る舞ってくれた
食事の準備を手伝う

就寝準備
寝る前に読書をするのが日課



起床
身支度を素早く済ませ
店に向かう

店に到着
毎朝、開店準備前に
店の奥に住んでいるおじいさんに挨拶をする

開店

勤務中

朝ごはんをいただいたお礼に
夜ご飯に料理を振る舞った
おじいさんと、一緒にいた友人とご飯を食べる

後片付けをし、帰宅



起床
毎朝新聞を読む

ラジオを流しながら
家事をする

天気もいいので
買い物に出かけることにした

買い物帰り、
たまたま友人に出会った
そのまま家に遊びに行くことに

長時間話してしまった
ご飯を作ってくれたので
一緒にいただいた

後片付けをし、帰宅
店主がいい人だったので
今度お店にいく予定を立てる





外の活動の気配を感じられる



柔軟な使い方ができる土間キッチン



ラインが印象的なファサード



高齢者の暮らしの気配を感じることができる



絵を集めることが趣味のおじさん
土間キッチンの入り口付近は住む人の色が出る



活動動線の終点にある寝室は休息の切り替えがしやすい



植物好きなおばあさんの家に遊びに来た孫



テイクアウトをしながら高齢者を気に掛けることができる



繋げて使っても立ち回りやすいキッチン



店内の様子を外に見せることで人の動きが商店街の風景の一部となる